

(1) 授業スタイルの定着（教科の特性から）

- 学習課題の提示から課題解決への思考の流れがスムーズになった。
- 教材の質・提示の方法、発問の工夫へとつながる。
 - ・情報教材から反応教材へと教材の質を意識するようになる。
 - ・反応教材を多く取り入れ、提示の方法・発問の工夫することで生徒の反応を高め、課題解決学習への意欲付けとつながる。
- 「考察」の部分の取り組み（グループ討議の方法、資料活用能力の育成）が不十分であったため、授業の最後まで課題解決意識が持続しないことがあった。

(2) 学習指導に生かす評価の工夫

- ・学習のねらいの明確化
 - 「ねらい」を明確化することで「つけたい力」が明らかとなり、授業構成や教材や発問の工夫へとつながった。
 - 「手だて」を講じることにより、きめ細やかな指導につながるとともに教師の指導のあり方を検証する機会ともなった。
 - 生徒自身も「ついた力」を実感することができ、学習意欲の向上へとつながった。
 - 1単位時間のねらいは明確にできたが、単元全体での「ねらい」や分野全体での「ねらい」を明確にしていく必要がある。
- ・個の学習状況の把握と支援
 - 「支援シート」の活用により、資料に対する抵抗感が少なくなり、資料を積極的に読み取ろうとする生徒が増えた。
 - 観点別チェックシートから単元ごとに個の学習状況を観点別で把握することができ、今後の指導の方向性を明確にすることができる。
 - 観点別チェックシートの項目と小テストの内容が同じようになってしまうことがよくあった。チェックシート項目を検討する必要がある。

(3) 学習意欲を引き出す資料（活用）の工夫

- プレゼンソフトを使用することで複数の資料を融合することができ、資料提示の方法に幅ができた。
- ビデオクリップを作成する経験を通して、教材研究のスタートである素材研究の重要性を認識できた。
- ビデオクリップ作成には相当な時間を要するので、個人で作成する方法より、各地区の教育研究会の社会科部会等の組織単位で作成する方法が良いと思う。